

## ワンダラーの読書日記

# クラフト・エヴィング商会プレゼンツ 「犬」 わが犬の記 川端康成

犬

クラフト・エヴィング商会プレゼンツ 犬

著者/川端康成, 幸田文, 志賀直哉,  
林芙美子, 他

中央公論新社, 2004年7月 189頁 ¥1,680

ISBN/ 978-4120035371



今月は中公文庫の短篇集「犬」の中から川端康成の筆による「わが犬の記」を紹介いたします。

「わが犬の記」は今から79年前の昭和7年に書かれたものですが、時代を超えて現代の愛犬家の共感を得るに足る随筆です。今回は小生のコメント無しで、著者の至言のみをご紹介します。

「散歩の道ずれと神経質をなほす助手と、これらは私の畜犬の実用的な目的であった」  
「犬はその性格や態度が飼い主に似るばかりでなく、その容貌までが飼い主に似て来るものものである」  
「動物の神経質といふものは、かがやく明るさの美しさなのである。そして、街頭に野放しされてゐる犬よりも、家のなかに愛育されてゐる犬の方が、反って野生の純潔さをたもつてゐるものである」

「ほんとうに犬を愛し、ほんとうに犬から愛されるには、やはり一人一犬に越したことはないであろうと、私も考へる」  
「犬は個人主義的であり、親子夫婦の愛情も、それが種族保存の役目をつとめる時の間しか続かないのが普通であるけれども、人間の飼い主への愛情は全く没我的で

あって、犬という動物は人間から愛されるために生き、人間を愛するために生きてゐると言つてもいいであろう」  
「しかしながら、四五頭または二三十頭を、こせついた芸当など教えることなく、溺れることなく、厭きることなく、平等無差別に淡々と愛する味ひは、けだし畜犬の三昧境であるかもしれない。

犬ばかりでなく、いろいろな動物のために設計した家を建て、動物の群れのなかに一人住むことは、私のかねがねからのひとつの空想である」  
「犬は人間の智慧の分け前を持つが、人間の偽りの分け前を持たぬといふことはほんととくだとしても、犬はやはり動物として愛すべきである。愛する犬のうち人間を見出すべきではなく、愛する犬のうち犬を見出すべきである。

いわゆる「忠犬物語」は今東西に数限りなく、動物愛の宣伝として始終書きたられてゐるが、忠犬を求めるところは必ずしも犬を愛する道ではない。孝子節婦の美談は読んでこそよけれ、実際その人に会つてみれば、面白くもない人間が多からうし、悲惨な境遇が生んだ歪みに過ぎないこともあらうし、人間の幸福として万人に求めてならないことは、犬の場合も同じである。ただしかし忠犬は忠臣よりも遥かに自然である。犬の忠実さには、本能的な生の喜びがいっぱい溢れ、それが動物のありがたさである」。